

かいへるもの、狂歌とて、

雲と見る芳野たばこのうすけふりはなのあたりを立のぼるかなと戯むれしもおかし又親しき友どちよりつとひて舊きをかたらひつるにもこれなくては其しほなきにも似たりたとひ山海の珍味をつくせる酒宴のむしろにも時々これを吸ざれば物たらぬ心地す又野邊の遊び川せうえう月の前花のもと酒の後茶のさきにもこの煙をかをらし雨に對し雪を賞し閑窓のうちひとりつくゑによりて物かうがふる折ふし又旅ゆく朝戸出にたばこ吸ながらにあゆめる趣又家のうちにもありてもあやにくに事まげきころたゞひとひきすひたるはいはんかたなくぞおぼゆる憂につけ樂しきにつけてもこれを伴はざれば悶る氣もひらかず嬉しき心ものびざるがごとし近き世の人のはいかいのほくとて、

西行の秋はたばこもなき世かなといひしもさることぞかしすでに此物世にあまねくひろまり人ごと家ごとに用ふることになりては客人をもてなすにもまつ前には是を進むるを常のならはしとすることになんなりけるいはんもかしこけれどそれのみかどの御製とて、

もくづたくあまならねどもけぶりぐさなみよる人のしほとこそなれとよませ給へりとかまた妙法院の宮の御言葉とてたばこに七の徳ありとの給ひしものも見えたり又もろこし人は一名を相思草といひて人ひとたびこれを吸ふときは朝夕思ひこがれて止ときなしとなんともかくにもあやしきまで人のめづる草にこそありけれ、

〔嬉遊笑覽^十飲^上〕六玉川にせきの小まんもうす色をのむといふ句有り昔ばたばこのむ女稀なりしとぞ娘容儀草子に昔は女のたばこ呑むこと遊女の外は怪我にもなかりしことなるに今たばこのまぬ女と精進する出家は稀なりと云り、

〔多識編^二毒草〕曼陀羅花今案也末奈須比。